



青田 茂雄

仙台建設業協会専務理事

～ セピア色の風景 ～

「敷居」

私は、今でも道路の縁石を踏んだり、人が踏んだりする姿に抵抗を感じる。

今、記憶に残っている教訓的な言葉のほとんどは、父親からのものだ。

母親の言葉は、ちゃんと食べなさい、何々は体にいいから、風邪ひくから、無理するな、などと体をいたわるのがほとんどだった。

また私は、小柄の上に痩せていたので、よく「ほねかわすじえもん！」などと、温かくからかわれたのを記憶している。

その母親の言葉で、唯一教訓的なものとして残っているのが、「敷居は踏むものではない、敷居を踏むのは、親の頭を踏むようなものだ」というものだった。

例えば、昔の農家の敷居と敷居は、出っ張っていて高いものだった。

座敷でも畳より高かったし、玄関の敷居は太い角材でできていて、またがなければならぬものだった。

幼児などは、その敷居を乗り越えるのが、成長の大きな目安でもあった。

その後、時代とともに敷居がどんどん低くなり、バリアフリーの時代になって、新しい家は全て真つ平らになった。そして、敷居を意識することは難しくなった。

「二度と家の敷居をまたぐな！」の言葉が残っているように、玄関の敷居は、内と外、家の者と客人を隔てるものだった。

敷居はまさに、大人になって知った言葉で、仏語であり茶道の言葉でもある「境界」

に近いものだった。

それだけ人の生き方にも大事な「区切り」や、次の世界に入るための準備を知らしめるため、敷居を親の頭に例えて、小さいときから繰り返し繰り返し、母親が教えたのであろうと今思う。

またぐような玄関に敷居、その上を走る引き戸、そしてその外側を走る雨戸も、今は、全てセピア色だ。

●あおた・しげお 1956年生まれ。福島県相馬市出身。80年に仙台市開発局に技師として入庁。都市整備局や建設局、宮城野区副区長などを歴任し、2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務めている。野球や競技ダンスの経験に加え、庭の野菜づくりに取り組む。スポーツ少年団(野球)の監督を務めたこともあるなど、地域活動に積極的。

※「支倉徒然」は毎号連載します。